

団（伊丹）、第36普通科連隊（伊丹）、第3特科連隊（姫路）もともに6時30分、災害派遣準備を開始した。

1) 情報収集

災害派遣部隊を運用するためには目的地の被害情報が不可欠である。第3師団司令部は県警との連絡に努めたがなかなか連絡がとれなかった。県庁との間には防災無線が用意されているが、これも通じなかった。

第3特科連隊（姫路）も県の防災課に懸命に連絡したがNTT電話も無線も通じなかった。そこで何とか連絡をとるため7時30分に県庁に連絡班を派遣した。しかし交通渋滞のためこれが県庁に到着したのは午後2時すぎであった。

2) 航空隊による偵察

八尾市の中部方面航空隊長は5時50分官舎から部隊の当直へ電話しヘリコプター2機の出動準備を命令した。準備を終えたヘリコプターは7時14分に離陸して約1時間かけて神戸・淡路を偵察し、8時30分伊丹駐屯地に着陸した。偵察員は広域にわたって火災が発生している状況を報告したが、さらに詳しく被災状況を確認するため9時半から11時まで情報担当者に乗せて偵察した。この偵察員は神戸でビルの倒壊、多数の火災、道路の亀裂などかなり大規模な災害が発生していることを報告した。

このように航空偵察によってかなり大きな被害を受けていることはわかったものの部隊運用に必要な詳細な情報は得られなかった。

(3) 近傍出動

1) 伊丹派出所

師団司令部ならびに特科連隊と県庁との連絡がとれず自衛隊の災害救助出動が実施されない中で、司令部が駐在する伊丹市の警察から6時35分に救助要請があった。「派出所が潰れて警官が埋まったから救出を頼む」という要請に応じて災害・警備担当の第3部長は直ちに第36普通科連隊

に近傍災害派遣を下命した。連隊では6時42分にまず偵察班を出動させたところ、潰れた交番を確認して7時10分に帰着しその状況を報告した。そこで7時35分中隊長以下42名がシャベル、斧、バール、ジャッキ、ロープなどの工具を積んで出動し、1時間にわたる救出作戦を展開した結果、1名を救出したが、1名はすでに圧死していた。

2) 西宮市

7時20分に西宮市民から「家が壊れ、生き埋めになっている人がいる。助けて欲しい」³⁰⁾ さらに別の西宮市民から「西宮市民病院が壊れ、けが人が出ている」³¹⁾ との救助要請の電話が師団司令部に入ったので再び第36普通科連隊に対応が命ぜられ、8時30分西宮市に近傍出動した³²⁾。

さらに出動の途中で西宮市百合野町で大規模な土砂崩れがあり30数人が生き埋めになっているとの情報が入ったので、第2中隊と対戦車中隊が現場に向かった。

(4) 県の自衛隊への出動要請

先に兵庫県の項で述べたように、第3特科連隊（姫路）から掛け続けていた電話が8時10分にやっと県庁の防災課とつながった。相手は防災係長であった。連隊から被害状況を照会し、連絡要員を派遣したい旨を述べた。係長は「7時に災害対策本部を設置した。被害の全容は不明であるが、大災害である。支援を依頼することになる」³³⁾ と答えた。

この時点で連隊は神戸に大災害が生じていることを知りすぐ災害派遣の準備をすすめ、9時には出動準備を完了し、県知事の派遣要請を待った。

その後、電話は不通となったが、10時頃やっと通じた。県の防災係長の説明を聞いたあと、連隊警備幹部は「この連絡をもって派遣要請があったと認識してよいか」³⁴⁾ と確認し、係長が「要請する」³⁵⁾ 旨を回答した。連隊はこの確認にもとづいて災害派遣出動を開始した。こうして10時14分警察のパトカーの先導で出発した。

30) 松島悠佐『阪神大震災 自衛隊かく戦えり』時事通信社 1996年 8頁

31) 同上 8頁

32) 同上 8頁

兵庫県警察本部「阪神・淡路大震災 警察活動の記録」平成8年1月 58頁

33) 兵庫県「阪神・淡路大震災——兵庫県の1年の記録」平成8年6月 9頁

34) 同上 10頁

35) 同上 10頁